

〈阿武隈の渓谷〉

夏井川のほとりにて

山本秀男

私はいま、夏井川のほとりで生活しています。

住まいが夏井川の下流、勤務先が上流、通う道がその中流で、40 kmの道のりのすべてが夏井川に添っているのです。

そして住まいと水道まで夏井川の水だということです。

夏井川といってもなじみがうすいと思いますが、阿武隈高地から東側へ流れ落ちる中小河川のうちでは、比較的著名な川のようにです。

その中流は渓谷をなし、夏井川渓谷県立自然公園に指定されているからです。夏井川はいくつもの谷を集めていますが、その支流の一つは背戸峨廊と呼ばれる美しい渓谷で観光、夏井川の中心となしているようです。20万分の1の地図「白河」を開いてくれませんか。右上部4分の1に夏井川のほとんどがおさまっています。

目印は磐越東線です。このローカル線に添うようにして流れる川にすぐ気付かれるでしょう。それが夏井川です。

「平」の市街地のすぐ北、夏井川の左岸に下平窪という地名をみつけて下さい。街道の西側の川沿いに私の平の住いがあります。ここから磐越東線に沿って北西へ登っていく道を磐越街道と呼び私の通勤コースとなっています。

磐越東線が夏井川と別れるところに小野新町(おのにいまち)があり、私が仕事をしている工場所在地です。

平には丘がいくつかありますが、平坦地は海拔10 m前後です。一方、小野新町は標高420 mをマークしており、阿武隈高地の市街地としては最も高い所です。道のりにしてわずか40 kmですが、標高差は400 mありますので、気象条件が全く違います。ここ福島県では天気予報は三地区に分けています。常磐線の走っている「浜通り」地方、東北本線沿いの「中通り」地方、そして日本海側の「会津」地方です。

冬の間の天気予報は三地方殆んど異っていました。浜通り晴、中通り雪、会津地方大雪注意報といったぐあいです。この大雪注意報も地方別に基準が違っているようで、30 cmの積雪は会津では並扱いですが、浜通りでは大雪扱いになるのです。

小野新町は中通り地方のうちに入るようです。今年の冬は、よく雪が降りましたが小野新町で雪、川前でみぞれ、平は雨という日が幾度かありました。

2月20日の大雪の日「降りられないから、小野新町に泊る」と家へ電話をしたら、「こちらは雨です」と妻の返事でした。

そんな夜、平に帰らない連中は、大いに飲むということになるのです。毎日自動車で渓谷の道を登り下りするので、共々酒を酌み交すという機会に恵まれませんので、大雪の夜の楽しさは格別というわけです。おわかり下されると思います。

「早く春こんかの」こんな言葉が当地のテレビのコマーシャルに使われていましたが、それほどに春は待ち遠しいものです。なにしろ待ちに待った桜が開き、小高い山の上の塩釜神社で花見の宴を張ったのが、4月28日だったのです。おかげで4月3日に東京で夜桜を仰いで以来一ヶ月も桜を眺めることができました。

夏井川の春は、平から訪れます。

夏井川の最下流に専福寺という寺がありますが、そこが一番先に咲きます。もちろん平地区の桜は一斉に咲くわけですが、それからまもなく、桜は夏井川渓谷を遡って順々に咲きはじめるのです。

夏井川の春は予告なしに訪れるわけではありません。彼岸の21日に、どうしても溶けなかった五味沢のアイスバーンが、にじむように溶けはじめたのです。

すると、日一日と褐色の谷が明るくなってきます。うっかりすると、見逃しそうな赤らんだ芽が木々の枯枝に吹きでるようにふくらんでくるからです。路肩の下草に緑が広がってきます。

いよいよ春がしのびよると肌で感じはじめた或る朝、籠場の滝の付近で濃いピンクの花群をみつけました。高い崖の上の方にへばりつくように咲いているのです。みんな松の木の上で咲きました。岩つつじです。手の届かない所に咲いているのです。文字通り眺めるだけで、手折ろうにも手ができません。

申し遅れましたが、私たちは毎日五人が一台の車で通っており、私以外は土地の人たちで草木にうとい私に、いろいろと教えてくれるのです。

そして都合のよいことには私は同乗者ですから、風景を思うまま楽しんでよいわけです。ガイドつきで渓谷の春を楽しんでいるといっても過言ではないでしょう。

岩つつじが咲きますと、それが春の合図である

かのように夏井川の溪谷に桜が咲きはじめます。

塩田、高崎つづいて江田、欄平、牛小川と登って行き、10日後に小前も花盛りを迎えます。これらの桜は並木ではありません。ここにも、あそこにもというように一本あるいは、四～五本思い思いに花を咲かせるのです。

高崎の第三発電所の桜は、黄色い古風な建物に添うように、枝いっぱいにつけましたが、それは大きな魂りのようで重たげでさえありました。幼児向けの絵本にあるような童話の世界にみる風景でした。

二つ折りになったような楓の若葉が谷をいっそう明るくしましたが、この若葉がピンと広がり、掌形がはっきりわかるようになると溪谷の道にも、ところどころ緑のトンネルができあがります。そして中流の溪谷が、もえぎ色に染まる頃、ようやく小野新町の桜が咲くのです。その頃になると私達が自慢する岩つつじは、木々の若葉の陰になり仰ぎみても、容易には、花の在りかがわからなくなってしまうのです。

もう川下では初夏です。麦もどンドン背伸びしていますし、川辺の柳はやわらかく緑でふくらんでいます。「かいどう」も咲いていれば「山吹」も咲いています。最後に梨の花が棚をおおうように咲き乱れました。こうして、毎日花の便りを高地に運んでいましたが、花の使者の役目も、もう終りになりました。

欄平の桜が谷間の狭い空を区切って誇らしげに咲いている頃ですから4月20日前後だったと思います。川前の少し手前で、ある朝、ひとりのサイクリストが下ってくるのに会いました。車種はランドナーでフロントバッグだけの身軽ないでたちの若い人でした。アノラックを着けており寒い山の上から降りてきたというかっこうです。

その日は私が運転していましたので左側へ寄り、親しみをこめて、クラクションで合図を送りました。しかし通じませんでした。彼は目線をかえずに下りて行ってしまいました。ちょっぴり淋しかったことでした。仙台から訪ねてきた若い人に岩つつじを見せようと寵場の滝の附近に車をとめて、谷添いを散歩しました。さきほども、のべましたように四月も末でしたので、岩つつじが見える場所を探すのに骨を折りました。私たちはそこで松の木にぶら下っているものをみつけました。チューブラタイヤです。安物じゃなさそうだな……といいながら手をのばしてとりました。KAWASUMIのマークが貼ってありました。勿論トレッドに傷

がついていましたが、何となく持ってかえりました。タイヤをかけていったのはプロの選手だろうと推測しましたが、これで都合二人のサイクリストに会ったような気がしました。

川澄さんについては思い出があるのです。東大阪の布施駅の近くだったと思います。喫茶店の一隅に川澄さんと私は向き合っていました。私はドミフォンのタイヤを試作して下さいとお願いしていたのです。終始私の話に耳を傾けて下さった川澄さんでしたが、「やはりご辞退させて下さい」と仰言いました。人の命にかかわることで絶対の安全性について自信を持ってないというのが、その理由でした。むこうの物をもっていってはいとも手軽にコピーしてくれるメーカーの多い時代であっただけにいまでも忘れられない印象でした。

その後、杉野さんが（大阪のチェンホイールメーカー杉野鉄工所社長）ヨーロッパで手に入れたドミフォンのホイールを私にくださったのですが、実物もみもしないで川澄さんに話をした私の無茶加減のほどを思い知ったのはそのときです。それはともかく10数年前にお会いしたことを思い出させてもらったことは楽しいことでした。夏井川はどうやら、私の友達になりつつあるようです。

筆者は現在ゼブラ自転車の取締役で、古くからのサイクリストの草分中の一人である。過去に数々の紀行文がある。

(NC誌75年7月号)